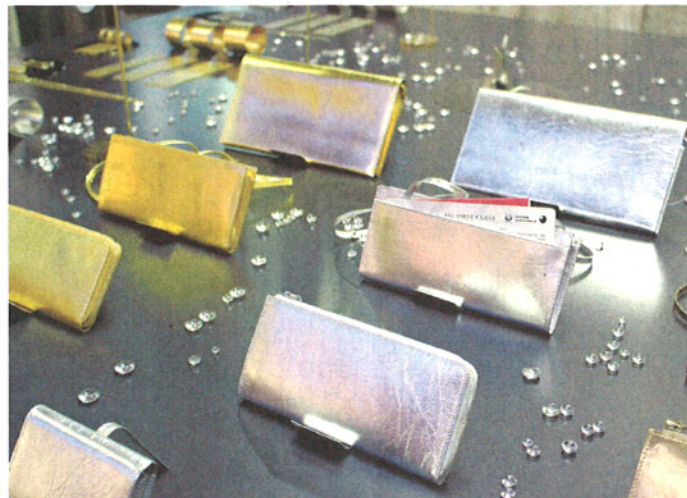


パリで1月下旬、世界最大級のインテリア見本市「メゾン・エ・オブジェ・パリ」が開かれた。最も注目を集めるHall 7の「now!」で、ブナの原木を厚さ1ミリのテープ状にしたスピーカー、継手で作った椅子など、伝統から最先端までの様々な技術を体現した日本デザインを紹介する。

世界狙う「日本デザイン」

パリ見本市、伝統から最先端集う



工法は、古くから神社や家造りで用いられてきた。通常は外側から見えない継手を、あえて見えるようにしたのが、「20年後の未来から来た椅子」をテーマにした、その名も「TSUGITE」。上部が宙に浮いて見えるようにトネリコ材とアクリルの異素材を組み合わせた。

「継手の魅力を未来へ伝えていきたい」というキョウデザイン事務所(東京・大田)の代表、安田喬さんと、五反田製作所(東京・品川)会長で継手の研究サンプルを100以上所有する家具モデラーの宮本茂紀さんが制作した。匠の精神と先端技術に普遍性を掛け合わせたブランド「tasca4D」

の一環。会場での価格は1脚378万円。「欧州や中東、アジアのコレクターやデザイナー、バイヤーから感嘆の声を頂いた」と、プロジェクトを運営するアステージ(新潟県燕市)の五十嵐義人さんは話す。

400年を超す歴史ある富山県高岡市の鋳物産業からは、さすが自由に曲げられる点を皿などに生かしたブ

ランド「ナガエプリュス」が出展。昨年11月に来日したトランプ米大統領のメラニア夫人への贈り物に選ばれたアクセサリ「TIN BREATH」に今回、革製品を加えた。

もんで独特な表情を醸し出す越前和紙のしわを、特殊加工で時間をかけて箔になじませ、すずびに写し込む技法を牛革に応用。兵庫県の熟練の革職人が上質な革に「箔」を型押しし、縫製は世界のトップブランドも手掛ける香川県の職人が担った。クラッチバッグや名刺入れなど5品目(税別1万5000円から)で、金、銀、アンティークゴールドをそろえた。

「ジャパン」の異名を持つ漆では丸嘉小坂漆器店(長野県塩尻市)が漆ガラスブランド「hyakushiiki(百色)」を発表。「百色眼鏡」と呼ばれた万華鏡をイメージした。伝統工芸士の小坂康人さんが長野県工業技術試験場と考案した、ガラス表面に漆を定着させる技術を利用。デザイナーの綾利洋さんの発案で、膨らむ花のつぼみを表現した器

「つぼみ」は時絵(まきえ)に使う絵筆で線描きをした。杯サイズで税別6200円から。米国の三ツ星レストランなどから注文が入ったという。

便利グッズとされる突っ張り棒を出展したのがトップメーカーの平安伸銅工業(大阪市)。3代目社長の竹内香予子さんは10年に家業に入ったとき「使いたい」という商品は社内になかった。治田将之さんと青木亮作さんのクリエイティブユニット「TENT」と出会い、突っ張り棒

を暮らしを豊かにする「一本の線」と再定義した。黒・白の2配色で、部品を自由に組み

合わせてライフスタイルを提案する「DRAW A LINE(ドローライン)」は高評価を受けた。

創設24年目を迎えた今回の来場者数は約8万9500人。1、9月の年2回開かれるが、1月展は日本からの出展も多く100社超。欧米のバイヤーから絶賛された高度な技術と丁寧なモノづくりが世界へと羽ばたく。

(ホームファッションコーディネーター 堀和子)

会場で特に人だかりが目立ったブナの木工品メーカー、ブナコ(青森県弘前市)のブース。流れる音楽がどこから聞こえてくるのかと壁の照明器具をのぞき込んだり、スツール(椅子)に耳を傾けたり。来場者の不思議な行動がさらに人を集めた。その正体は高さ60センチ、直径18.6センチでスピーカーとは思えないデザインの「BUNACO SPEAKER」

ブナをコイル状に 上向きスピーカー

の最新作だ。かつらむきのようにブナの原木を厚さ1ミリの薄い板状に裁断し、コイル状に巻き付けた。細かい段差とブナ材の吸音性が透明感のある柔らかな音色を生む。一般には横向きのスピーカー部分が真上を向き、天井に反射した音が空間全体に降り注ぐ。

「美しさを際立たせるため透明なアクリルの筒でスピーカー部を支えた。あえて端をほつれた『未完成』な状態にして、初めて見る人にも構造や職人による製作工程が直感的にわかるように意識した」。デザインを手掛けたnendo(ネンド、東京・港)の佐藤オオキ代表はこう話す。電源製造の光城精工(青森県平川市)を含む3社で共同開発。税別12万円で、3月から国内外の有名百貨店や専門店販売する。

日本が世界に誇る職人技はいくつもある。中でもくぎを使わず、複雑に切り口を加工した木材同士を接合して組む「継手(つぎて)」と呼ぶ

